



れないと思うと少々残念ではある。

今西文庫を概観すると、和文単行本には人類学、文化論、生態学や環境関係以外に国内外の山関係の書が多い。深田久彌の“日本百名山”を含め“シルクロードの旅”や“ヒマラヤの高峰・上下”など「山の文学全集」が揃っている。雑誌類も「山岳」、「岳人」の他、「季刊人類学」が備わっている。洋書も進化論関係や民族学あるいは山岳関係の書、植物生態学、探検や調査に関する地理や紀行文等の書物が集められている。

この今西文庫には青い色の装丁を施した一連の書籍が書棚の一角を占めている。これらは「奥アマゾン探検隊第1次隊報告書」、「南アルプスの森林植生」、「ヒマラヤ関係図書目録」といった現地調査の報告書や資料集である。海外調査のものだけでなく、岐阜県に関するものもある。「奥美濃ノート」があって、驚いたことにその隣に「飛騨地域における農林畜産複合化への道」があった。これは、1981年に岐阜県の依頼を受けて、岐阜大学が石川達芳教授をリーダーとして、農学部の手教員達が分担して飛騨地域を駆け巡り、現地で地元関係者と論議・連携しながら“飛騨の明日を夢見て”描いた懐かしのフィールドワークの書である。共著者の名前を見た時、精力的に現地調査をした過去の日々とメンバーの顔が思い出された。しかし、当時12人いたメンバーの殆どが今はもう大学にはいない。このうちの一人で人生観を語り合い、励まし合い、共同研究した学兄の林進教授もこの3月末で定年退官される。改めて時の流れの速さに感慨無量の思いがする。この書が今西文庫の書架の一隅に、かつての灰色の表紙から青い装丁で衣替えして納められていることに私は少々嬉しい思いがした。

この青い装丁書の隣の書棚にも“抜刷集”として整理されたフィールドワークの書が並ぶ。これらは多くの研究者達から今西錦司先生への寄贈書である。

文庫にある単行本の背表紙文字をぼんやりと目で追っていると、いつしかこれらの文字が自分の海外調査の思い出と重なってくる。

南米コロンビアでの野生インゲンマメの探索調査だった。日が暮れた暗黒のアンデス山中を車で移動していた時のこと。余りにも遠い目的地に心身とも疲れ、次第に不安がついていった。幾つ目かの山越えをした時、突然、空の一角が明るくなった。そして峠の真下には煌々と輝く街灯があたかも真珠の首輪のように連なって闇夜の中で光り輝いていた。その幻想的で美しいイルミネーションに思わず感嘆した、あの夜景。

中米グアテマラでは目的地のアテラン湖の手前まで来た時、巨大な落石が5mの道幅を塞いでいて前進できなかった。ガソリンも尽きかけて途方にくれていたわ

れわれの前に反対側にある町の方から手にスコップを持った人達がトラックの荷台で手を振りながら救援に来てくれた。彼らは岩の上からハンマーで岩を叩き始めた。驚いたことにそれほど時間もかからないうちに岩は砕かれて谷へ落とされた。われわれ日本人調査隊を乗せた4輪駆動車が彼らの前を通った時、大歓声が起こったあの日の出来事。

アフリカ・ガーナでは、隣国ブルキナ・ファソに近い北の国境の町、ボルガタンガに日本人とした始めて入ったその日の帰り、夜中の1時まで車で走り続けてタマレに在るゲストハウスに着いた。その広い庭に出て夜空を仰いだ時、何一つ障害物の無い満天の空にこれほど多くの星々が存在していたのかと宇宙の壮大さに感動したこと。

それからもっと昔、大学紛争の最中、京都大学東南アジアセンターの派遣留学生として大学院博士課程の1年半をマレーシアのテロチェンガイ稲作試験場で過ごした時のこと。その農業試験場で、高校を出たばかりで私の研究助手をしていていたシャルディンとの研究三昧の日々は、それまでで私が始めて人生の幸せを実感した瞬間でもあった。ある朝、降雨後に思いがけない単車の転倒事故を起こした時、いやというほどアスファルト地面に腹部をたたきつけられて息ができず、声が出なかった。その時、頭上を回転して落下した単車の向こうで倒れたまま必死で私を呼ぶシャルディンを見た瞬間、自分でも驚くほど気丈になった。血の出ている自分の足を腰の日本手ぬぐいを裂いて止血し、急ブレーキを踏む事故の原因となったマレイ人親子を泣きながら責めたていて彼を抱きかかえ起こした。そして、なんとかエンジンが始動した単車の後部に彼を乗せて歪んだハンドルにもたれるようにふらふらと試験場に辿り着いた。試験場の皆が驚いて集まってきて、そのまま病院へ運ばれたこと。やがて二人は回復し、再び仕事を始めた。あのシャルディンは今、どうしているのだろうか。思い起こすと頬が熱くなる。

私は今、何故、今西文庫がこれほどまでに私を引き付けるのかが分かったような気がする。それは恐らく、未知への挑戦と、その体験を通してのみ得られるフィールドワークの面白さと意外性、そして自然の威厳に対する生物としての人間の無力さと小さな勇気が私の体の中で新たな創造力を掻き立てるからではないかと。あの今西錦司を育んだ京都の気風と風土が、同じ地で多感な青年期の十数年間を過ごした私にも時知れず宿っているのだろうか。図書館のこの小さな空間が私にさらなるロマンの夢へと誘うのである。

(ほりうち たかつぐ：留学生センター長 農学部教授)